

【 8 】

氏名	岡 本 孝 之
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	甲 第 4 7 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和36年 3 月31日
学 位 授 与 の 要 件	医学研究科外科系外科学専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当)
学 位 論 文 題 目	大動脈弁閉鎖不全症に対する大動脈基部皺襞法の実験的研究
論 文 審 査 委 員	教授 砂 田 輝 武 教授 陣内伝之助 教授 児 玉 俊 夫

学 位 論 文 内 容 要 旨

大動脈弁閉鎖不全症に対する治療法の一つとしての大動脈基部皺襞法の効果を検討するため、著者はまず予備実験として、犬30余頭を用いて実験的に一弁切開による大動脈弁閉鎖不全を作成してその生存をはかり、ついで同一方法を用いて作成した40余頭の大動脈弁閉鎖不全犬に対して大動脈基部皺襞法による二尖弁作成実験を行ない、その効果を血行力学的、レ線学的、心電図学的、組織学的に検討し、つぎの結論を得た。

〔Ⅰ〕実験的大動脈弁閉鎖不全は一弁完全切開によるものは、逆流高度のため術後心不全を起し、長期生存は不可能で最長生存日数は4日であった。しかもこれは non coronary cusp 切開例であり、rightあるいは left coronary cusp を切開したものでは術後24時間以内に死亡した。

〔Ⅱ〕non coronary cusp を切開した大動脈弁閉鎖不全犬において、大動脈基部、non coronary cusp の領域の皺襞作成を行なった。皺襞作成の程度は周径の約3分の1、位置は上行大動脈後壁、バルサルバ洞と上行大動脈の移行部の non coronary cusp の交連部、後部バルサルバ洞との三つの部位に分けて、それぞれの場合を比較検討した。

- (1) 上行大動脈例では改善は認められず、数日で全例死亡した。
- (2) バルサルバ洞と上行大動脈の移行部の例では著明な改善が見られ、長期生存例が得られたが、時日の経過とともに縫合糸による縫合部の組織断裂の拡大が認められた。

(3) 後部バルサルバ洞の例でも明らかに改善が認められ、生存日数の延長を得たが、術後20日前後で全例縫合部のバルサルバ洞の断裂を起して死亡した。

以上の如く皺襞作成による二尖弁作成はバルサルバ洞と上行大動脈の移行部の皺襞作成により充分効果を挙げ得るが、更に皺襞作成部位を上行大動脈基部皺襞より後部バルサルバ洞への移行部にかけて広くすることにより、縫合糸による組織断裂の拡大をある程度防ぐことができた。

以上の実験結果より大動脈基部皺襞作成による二尖弁作成法は大動脈弁閉鎖不全症に対して、適応を選べば用いて効果のある方法であるとの結論を得た。

論文審査の結果の要旨

岡本孝之提出の「大動脈弁閉鎖不全症に対する大動脈基部皺襞法の実験的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

大動脈弁閉鎖不全症に対する外科的療法として現在適切な方法がないのに鑑み、著者は手術手技が簡単で侵襲の少ない大動脈基部皺襞作成法を考案し、犬を用いて本法の効果を血行力学的、X線学的、心電図学的並びに病理組織学的に検討を加えた。その成績は non-coronary cusp 一弁を完全に切開した対照実験の場合大動脈弁閉鎖不全のため4日以内に死亡するが、これに大動脈基部皺襞作成を行うに、上行大動脈後壁に作成したものでは改善はみられず、また後部バルサルバ洞に作成したものでは明らかに改善をみるが洞の断裂を来し20日前後で死亡するのに対し、後部バルサルバ洞から上行大動脈基部後壁にかけ広く皺襞作成を行ったものでは著大な改善がみられ長期生存例をうることができ、本法は大動脈弁閉鎖不全症に対し適応を選べば効果ある手術法であると結論している。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。